立命館大学
日本文学会 ニュース No. 12
「論究日本文学」 第20号 付録 1963.3.30

馬上吟

穆山人

「甲子吟行」に

馬上吟

道のべの木槿は馬にくはれけり

といふ句のあることは、この紀行の跋の素堂の「しばらく故園にとどまりて、大和廻りすとて、わたゆみを琵琶になぐさみ、竹四五本の嵐かなと、隠家によせける。此両句をとりわけ世人もてはやしけるとなり。しかれども山路きてのすみれ、道ばたのむくげこそ、此吟行の秀逸なるべけれ。」といふ文とからめて、あまりに有名です。

わた弓や琵琶になぐさむ竹のおと

蔦植て竹四五本のあらし哉

の二句と

山路来て何やらゆかしすみれ草

道のべの木槿は馬にくはれけり

の二句を、改めて並べてみますと、はじめの二句は、ねらひのはつきりした構へた句で、誰の目にもとまりますが、あとのは、尋常過ぎるやうで、素堂の注意でもなければ、見逃されさうな句かとも思はれます。素堂のさうした配慮が誇張されて出てゐるのだと、軽く考へれば、それまでですが、素堂ほどの人が、「此吟行の秀逸なるべけれ」とまで言つてゐるのだから、とこだはれば、何とかほめるネタを見つけねばなりますまい。

「山路来て」の句は置いて、「道のべの」の句を、旧解が、仏頂禅師と芭蕉の対談を創作して、禅機を読みとらうとしたり、「出る杭は打たれる」だとか、「槿花一朝夢」だとかの、寓意を托すものとしたり、喰はれた木槿を可哀想なものに考へる心の現れであるとしたり、奇がないのがよいとしたり、したのは、その涙ぐましい努力のあとを示すものでした。

ところで、近頃、或学者が、木槿は馬は喰はないので、これは芭蕉の誤解だといふ説を発表された由で、そのことを、我が師武智雅一先生は、酒飲みながら話され、更に語をついで、「馬がむくげを喰はんことくらゐはわかりきつた話で、馬が長い首をむくげの上にさしのべて、口をもぐもぐさせたのを、喰はれけりと、芭蕉は表現したのぢやないか。俳諧といふものはそんなものぢやないのか。」とおつしやるのです。

まさにその通りなのです。道の辺の木槿が実際に喰はれたのなら、何の変哲もないのです。喰はぬものだからこそ、飄然の趣が出て、面白いのです。馬上の芭蕉は、それを承知でうそぶいてゐるのです。まことに憎い人です。そして、「秀逸なるべけれ」ととぼけた素堂も亦、憎い人です。

この紀行のすぐ前の、捨子の記事にしても、フィクションでせう。この木槿の句だけを、馬鹿正直に解するのをかしいのです。曾良の「奥の細道随行日記」からも、芭蕉の「詩と真実」は、思ひ知らされたはずなのですが、近世文学の研究者には、まだまだ素朴なお人好しが多いのでせうか。

（十一月十一日）